

山田詠美『ぼくは勉強ができない』

―〈心〉と〈体〉の相互関係―

一 はじめに

山田詠美『ぼくは勉強ができない』は、雑誌「新潮」に一九九一年五月から一九九二年二月まで、断続して連載された^{〔1〕}。

主人公の高校生・時田秀美は、サッカー部に所属しており、成績は悪いがクラスの人気者である。出版社に勤めている母と、祖父との三人家族。母の仁子は、家庭が貧しいからと言ってもおしゃれには手を抜かず、週末には楽しそうにデートに出かける。祖父の隆一郎は、散歩の途中で出会った年配の女性にしばしば恋をしては、孫に恋愛相談を持ちかける。クラスの担任で、サッカー部の顧問でもある桜井先生は、秀美の悩み相談に乗ってくれる「話のわかる」大人の男である。秀美は、本を読むことなど、彼から多くの影響を受けている。秀美の恋人・桃子は、ショットバーで働いている年上の女性。学校で起きた出来事に思い悩んでいる秀美に対して、大人の女性としてアドバイスする、彼の良き理解者である。

秀美は、クラスメイトから「大学に行かないとろくな人間にならない」と言われる。大学に進学すべきか就職すべきか迷っていた彼に、桃子は「その気持ちは、焦燥といい、これまで沢山の小説にあらゆる方法で書かれていることだ」と教えた。また、ある日、桃子が昔の男と会って

藤 田 沙 矢 香

た事実を知り、愕然としていた秀美に、女友達から借りた詩集が気持ちを落ち着かせるのに役立った。さらに、「芸術というものはあらゆる無駄から生み出される」という桜井先生の言葉を聞き、恋愛における芸術的要素について、自分と桃子の立場に置き換えて考えたりしたこともあった。このように、秀美は日常生活の中で、周りの人物からの助けを借りつつ、芸術、特に文学から学ぶことは多く、それらが彼自身を成長させているものだと思った。秀美は大学に進学し、文学を学ぶことを決意する。

九つの章には、テーマが共通していないように見受けられるが、実は作品全体を一貫した主張がある。それは、人間の内面的・精神的な〈心〉と、外面的・肉体的または物質的な〈体〉との相互関係についてである。主人公の高校生・時田秀美という人物の価値観や美意識を整理したうえで、この大きなテーマをどのように追求しているのかを、主要な章を取り上げて読み解いていく。

二 時田秀美の価値観・美意識

第一章『ぼくは勉強ができない』では、クラス委員を決める投票で秀美は書記になった。秀美より三票多く獲得し、委員長になった脇山は、勉強はできるが、女にもてない。

ここで、主人公・時田秀美の、とても個性的な価値観・美意識が、読者に強い印象を残す。新井豊美氏は、彼について「自分らしい美意識や価値観の尺度を持つことで個を純粹にアピールすることのできるユニークな少年」と表現している³。

彼の〈自分らしさ〉というのは、彼の育ってきた家庭環境が、「いわゆる普通の家庭」ではなく、「教師の言うところの複雑な家庭環境」であるからだろう。自身の家庭環境について、「ぼくの母は、ぼくを産み、自分好みに、ぼくを育てた。母の父親、つまりぼくの祖父と、おもしろがつて、ぼくを育てたように思える」と、秀美は語っている。彼の最も身近な大人である母と祖父は、二人とも恋愛することを常に楽しんでいゑる。そんな二人を見て育ってきた秀美について、松山裕子氏は「父母の恋愛が破れた果てに形成された家庭に育ったにもかかわらず、秀美には恋愛に対するネガティブイメージが無い」と述べている³。

このようにして、秀美は、ある価値観を獲得した。彼にとつて生きることの最大級の価値は〈女の子にもてること〉、〈人気者でいること〉なのである。そして、それをやってのけるには、〈いい顔〉をしていることが不可欠になるという。

「ぼくの母は、いつも格好の良い男になるのよ、と、ぼくを諭してくれたのだ」、「ぼくは、〈いい顔〉をしていて女にもてる男を無条件に尊敬する」、「どんなに成績が良くて、りっぱなことを言えるような人物でも、その人が変な顔で女にもてなかつたらずい分と虚しいような気がする」、「〈いい顔〉をした人物の書く文章はたいいおもしろい」などという秀美の発言がある。つまり、〈いい生き方〉をしている、〈いい内面〉をもった人物は、たいい〈いい顔〉、〈いい外見〉をしている。これが、秀美の獲得した一つの価値観である。

第五章『〇をつけよ』では、秀美が価値判断の基準を身につけた、ある出来事が語られている。ある日、彼は財布に入れていた避妊具を、運の悪いことに、学年主任の佐藤先生の前で落としてしまった。佐藤先生は「不純異性交遊だ」と咎め、これだから勉強が出来ないのだと言いつ捨てた。その説教を聞いて嫌気がさした秀美は、いつも悩み相談に乗ってくれる桜井先生に話を持ちかけた。「佐藤先生のような、余計なお世話で善し悪しを、二通りだけでつけていく人にならないように、努力することは出来る」。桜井先生は、これから社会に出て行く秀美に対して、このようにアドバイスをした。

秀美はそのアドバイスを受け、次のように結論を出した。「ぼくは、ぼくなりの判断基準を作つて行かなくてはならない。忙しいのだ。何と言つても、その基準に、世間一般の定義を持ち込むようなちゃんなことを、ぼくは、決してしたくないのだから。ぼくは、自分の心にこう言う。すべてに、丸をつけよ。とりあえずは、そこから始めるのだ。そこからやがて生まれて行く沢山のばつを、ぼくはゆつくりと選び取つて行くのだ」。

新井豊美氏は、「否定ではなくまず肯定から」という時田秀美のコンセプトは、こうして高校生活の中で起こるさまざまな出来事、そこにある古いモラルの枠組みのすべてを自分の柔らかな価値観で次々に転倒させ解体してゆく」と、新しいタイプの主人公だと解釈した⁵。

この体験をとおして、秀美は、全ての出来事をまず肯定し、自分なりの判断基準によつて否定すべきものを見定め、オリジナルの価値観を身につけようと決意をする。

三 〈心〉と〈体〉の相互関係

第二章『あなたの高尚な悩み』では、物知りと評判だが、書物で得た知識を口にし、不幸を装っているサッカー部員の植草が、練習中に骨折するという事件が起こる。高尚で哲学的な〈精神〉の苦痛や悩みと、〈肉体〉や環境に関する現実的苦痛や悩みでは、どちらがより深刻であるかというテーマをともなう話が進められる。

秀美と同じクラスの副委員長・黒川礼子は、正義感から男子生徒を注意するほど〈精神〉が強い。しかし、そんな彼女の悩みは、貧血症の彼女の〈体〉である。気分が悪い間は何も考えられなくなり、そんな自分が気に入らないと、彼女は語っている。では、秀美の場合はどうか。恋人・桃子によると、彼は時々、詩人のようなロマンティックなことを口にするが、空腹の時は、自分の〈体〉を満たす目の前の食べ物のことしか考えていないという。

この〈精神的苦痛〉対〈肉体的苦痛〉の問題は、植草が骨折することと決着がつく。彼は足の痛みに耐えられなくなって、普段口になっている哲学的な〈心〉の悩みよりも、いま目の前の〈体〉の痛みのほうが深刻であること認めたのだ。

普段から〈心〉が強くても、〈体〉に不調があらわれた時には、その不調に打ち勝つことができない。つまり、〈心〉の悩みよりも〈体〉の苦痛のほうが優位であるといえる。

さらに、後日、秀美が桃子の家へ訪ねると、彼女はひどい宿酔から、秀美の話を聞いている余裕がないと訴えてきた。〈体〉の不調のために、〈精神〉の余裕がない彼女を見て、秀美の「うーん、やっぱり。頭痛は高尚な悩みを凌駕する」という言葉で、この章は締めくくられた。

ところが、第三章『雑音の順位』では、〈心〉が〈体〉より優位に立つこともあるのだということを実感する出来事が起こる。恋人の桃子と一時、破局の危機をむかえることになった秀美は、彼女のアパートへ行き、部屋のドアをノックする。彼は「握り拳が腫れる程、力任せにドアを叩き続けた」。その時、「彼女は、僕に会いたくないのだ。あるいは、会えない事情があるのだ」と悟り、呆然としてしまった。そして、仕方なしに家路につく時に、「〈心〉の不安は、〈肉体〉なんぞにかまってはられないのだ」と実感した。さらに、眠ることも食べることもままならない秀美は、「初めて、〈体〉をコントロールするものが何であるかを悟った」という。つまり、ここでは、〈心〉の不安は〈肉体〉のコントロールが効かないほど、自分を支配してしまうことを知ったのだ。

第四章『健全な精神』で、桃子とすれ違いが生じてしまった秀美が、幼な馴染みの真理に相談を持ちかけに行く。真理の主張はこうだ。「〈体〉が健全なのは基本なのよね。（中略）でも、〈精神状態〉も、健全だっただけなのは困るのよ。もっと、不純じゃなきゃ。いやらしくないのって、つまらないよ」。〈体〉は健全で、〈心〉は不純なのが理想だという。秀美は、なかなか説得力のある言葉だと思った。

翌日、彼は偶然にも体育教師の口から「健全な〈肉体〉に健全な〈精神〉が宿る」という言葉を聞いて、不思議な気持ちになった。秀美は「〈肉体〉の健康さは、はつきりと説明出来るが、それに宿る健康な〈心〉と」いうのが良く解らない」と戸惑った。

なぜかサッカー部の練習に熱中し始めた秀美は、人よりも多く体を動かすことで、彼の〈肉体〉は鍛えあげられ、今までよりもさらに健全な

ものになった。ところが、家に戻ると、彼は食欲を失っていた。大飯食らいの彼の〈心〉が食べることを拒んでいたのだ。ここで秀美は、〈体〉はとても健康だが、〈心〉が不健全で情けないという、真理の言っていた理想の状態になった。

秀美は、健全なる〈肉体〉を作るのは簡単だが、そこに健全なる〈精神〉を宿すのには、「長い時間と高等技術が必要みたいなのだ」と悟った。〈心〉と〈体〉のバランスはとても大事で、〈肉体〉だけを鍛えても、そこに健全なる〈精神〉はなかなか宿らないということだ。

さらに、第六章『時差ほけ回復』で、〈心〉と〈体〉は不可分であるということを書いて知る出来事が起こる。秀美のクラスメイトの片山が、マンションの屋上から飛び降り自殺をしたのだ。彼は不眠症で、〈体〉の調子が悪かった。彼の生活に支障をきたした〈体〉の不調が続き、解消する方法を得られなかった片山は、〈心〉も病んでしまったと考えられる。沼野充義氏も「一種の生理的な〈時差ほけ〉のせいで体調が狂って〈希望が崩壊された〉からではないか」と述べている。⁽⁶⁾〈心〉と〈体〉は不可分で、互いに影響を及ぼし合っているといえる。

四 おわりに

「〈心〉と〈体〉の相互関係」という点において、この作品の中では明らかに決着がついていない。秀美は、最終的に大学へ進学することを決心するが、今後この問題については、秀美自身が、大学での文学の勉強をとおして追究していくだろうというきざしを見せつつ、この物語は綴じられる。

今後は、山田詠美の原点ともいえるデビュー作『ベッドタイムアイズ』

で、この「〈心〉と〈体〉の相互関係」という問題がどのように追究されているのかを読んでいきたい。

注

(1) 各章の初出は次の通り。

- | | |
|---------------------------------------|-----------------|
| 『ぼくは勉強ができない』 | 「新潮」一九九一年五月号 |
| 『あなたの高尚な悩み』 | 「新潮」一九九一年七月号 |
| 『雑音の順位』 | 「新潮」一九九一年九月号 |
| 『健全な精神』 | 「新潮」一九九一年十一月号 |
| 『〇をつけよ』 | 「新潮」一九九二年一月号 |
| 『時差ほけ回復』 | 「新潮」一九九二年四月号 |
| 『賢者の皮むき』 | 「新潮」一九九二年八月号 |
| 『ぼくは勉強ができる』 | 「新潮」一九九二年十二月号 |
| 『眠れる分度器』 | 「文藝」一九九一年秋号・冬号 |
| (2) 新井豊美「背骨のうごく時」 | 「早稲田文学」一九九三年八月 |
| (3) 松山裕子「時田秀美というシーシュポス」 | 山田詠美『あなたの高尚な悩み』 |
| (4) 括弧へは引用者による。以下同じ。 | |
| (5) (2) に同じ。 | |
| (6) 沼野充義「女にもてる」と「勉強ができる」ではどっちがいいんだろう」 | |

「早稲田文学」一九九三年八月